

## 第4章 行列式 (行列式)

樋口さぶろお <https://hig3.net>

龍谷大学 先端理工学部 数理・情報科学課程

線形代数☆演習 I L21(2022-06-22 Wed)

最終更新: Time-stamp: "2022-06-22 Wed 14:17 JST hig"

### 今日の目標

- 行列式の定義を説明できる
- 定義に従って, 2,3 次の行列式を計算できる
- 行列式の交代性を説明できる
- 2 次の行列式と平行四辺形の面積の関係を説明できる



## ここまで来たよ

- 20 第 4 章 行列式 (置換)
  - ◆偶置換と奇置換|1. 置換
  - 巡回置換と互換
  
- 21 第 4 章 行列式 (行列式)
  - ◆行列式の定義|2. 行列式
  - ◆多重線形性と交代性|2. 行列式
  - 面積・拡大率としての行列式

## 置換の符号の性質

加藤 線形代数 定理 1-1(p.104), 系 1-1(p.105)

## 定理 1 (置換の符号の合成公式)

置換  $\sigma, \tau$ , 単位置換  $e$  に対して,

- $\operatorname{sgn}(\sigma\tau) = \operatorname{sgn} \sigma \times \operatorname{sgn} \tau$  (\*)
- $\operatorname{sgn} e = 1$ .
- $\operatorname{sgn}(\sigma^{-1}) = \operatorname{sgn} \sigma$ .

「 $\operatorname{sgn}$  は置換の群から乗法群  $\{\pm 1\}$  への群準同形写像」

代数入門

(\*) の証明

$$D(x_{\tau(1)}, \dots) = \operatorname{sgn} \tau \times D(x_1, \dots)$$

の分子分母にはそれぞれ  $x_1, \dots, x_n$  が現れている. 約分すると消えるのだから, どんな文字でもいい.  $x_1, \dots, x_n$  を,  $y_{\sigma(1)}, \dots, y_{\sigma(n)}$  に置き換える.  $\operatorname{sgn}$  の定義より,

$$\text{右辺} = \operatorname{sgn}(\tau) \times D(y_{\sigma(1)}, \dots) = \operatorname{sgn}(\tau) \times \operatorname{sgn}(\sigma) D(y_1, \dots)$$

$$\text{左辺} = D(y_{\sigma(\tau(1))}, \dots) = \operatorname{sgn}(\sigma\tau) \times D(y_1, \dots)$$

## ◆偶置換と奇置換|1. 置換

加藤 線形代数 定理 1-2(p.106)

## 定理 2

 $X = \{1, \dots, n\}$  の置換を考える ( $n \geq 2$ ).

- 置換全体は  ${}_n P_n = n!$  個ある.
- 偶置換は  $n!/2$  個ある.
- 奇置換は  $n!/2$  個ある.

証明  $\tau = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & \cdots \\ 2 & 1 & 3 & 4 & \cdots \end{pmatrix}$  を固定する.  $\tau^{-1} = \tau$ .  $\text{sgn } \tau = -1$ .

$X$  の置換全体の集合  $S_n$  の上の変換  $\sigma \mapsto \tau\sigma$  を考えると, これは 1 対 1.

## ここまで来たよ

- 20 第 4 章 行列式 (置換)
  - ◆偶置換と奇置換|1. 置換
  - 巡回置換と互換
  
- 21 第 4 章 行列式 (行列式)
  - ◆行列式の定義|2. 行列式
  - ◆多重線形性と交代性|2. 行列式
  - 面積・拡大率としての行列式

## 巡回置換と互換

### 定義 3 (巡回置換)

$1 \leq k \leq n$  とする. 次の形の置換を巡回置換 (cyclic permutation) という.

$$\begin{aligned}\sigma(i_1) &= i_2, \\ \sigma(i_2) &= i_3, \\ &\vdots \\ \sigma(i_{k-1}) &= i_k \\ \sigma(i_k) &= i_1, \\ \sigma(i) &= i \quad (\text{他の } i \text{ つまり } i \neq i_1, \dots, i_k)\end{aligned}$$

例  $n = 5, k = 3$  で  $\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 5 & 2 & 3 & 1 & 4 \end{pmatrix}$

略記 上の巡回置換を  $(4\ 1\ 5) = (1\ 5\ 4) = (5\ 4\ 1)$  と略記する.

## 定義 4 (互換)

長さ 2 の巡回置換  $(i_1 i_2)$  ( $i_1 \neq i_2$ ) を **互換 (transposition)** という.

$$\sigma(i_1) = i_2,$$

$$\sigma(i_2) = i_1,$$

$$\sigma(i) = i \quad (i \neq i_1, i_2)$$

加藤 線形代数 例 5(p.105)

## 事実 5

互換は奇置換

例  $\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 1 & 5 & 3 & 4 & 2 \end{pmatrix} = (2\ 5)$

## 置換の符号の別の特徴づけ

加藤 線形代数 なし

### 定理 6

置換  $\sigma$  が,  
 $k$  個の互換  $\tau_i$  ( $i = 1, \dots, k$ ) の積  $\sigma = \tau_k \dots \tau_1$  として書けるとき,

$$\operatorname{sgn} \sigma = (-1)^k$$

業界用語: 特徴づけ=characterization, defining property. 定義と同値で, こちらを定義にしてもよいような性質のこと.



こちらを定義にする場合, 先に **well-definedness** を確かめる必要がある

- すべての置換は, 互換の合成として書ける
- 互換の個数の偶奇は, 互換の合成の表し方によって変わらない

前半部分 (書けること)

### 事実 7

すべての置換は巡回置換の合成で書ける.

加藤 線形代数 章末問題 1(p.133)

### 事実 8

長さ  $k$  の巡回置換は,  $k - 1$  個の互換の合成で書ける.

加藤 線形代数 例 6, 練習 6(p.106)

よって, 巡回置換は, 長さ  $k$  が偶数なら奇置換, 奇数なら偶置換.

### 事実 9

すべての置換は互換の合成で書ける.

加藤 線形代数 章末問題 2(p.133)

## ここまで来たよ

- 20 第 4 章 行列式 (置換)
  - ◆偶置換と奇置換|1. 置換
  - 巡回置換と互換
- 21 第 4 章 行列式 (行列式)
  - ◆行列式の定義|2. 行列式
  - ◆多重線形性と交代性|2. 行列式
  - 面積・拡大率としての行列式

## 互換のグラフ

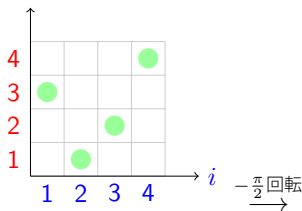
$n = 4, X = \{1, 2, 3, 4\}$ .

例として  $X$  の置換  $\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 3 & 1 & 2 & 4 \end{pmatrix}$

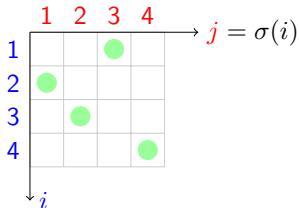
左が  $j = \sigma(i)$  の 'グラフ'

- 変換であること: 各列に●が1個ある
- '1対1かつ上への' 変換であること: 各行に●が1個ある

$j = \sigma(i)$



$-\frac{\pi}{2}$ 回転  
→



あれっ 4 次の正方行列

みたい…

$X = \{1, \dots, n\}$  の置換  $\sigma$  は,  $n$  次の正方行列の, 特定パターンの  $n$  個の成分●  
( $i, \sigma(i)$ ) ( $i = 1, \dots, n$ ) の選択を指定する.

問:  $\sigma^{-1}$  のグラフは?

## ◆行列式の定義

加藤 線形代数 定義 2-1(p.107)

## 定義 10 (行列式)

 $A = [a_{ij}]$ :  $n$  次正方行列に対して,

$$\det A = \sum_{\sigma} \operatorname{sgn}(\text{置換 } \bullet) \bullet \text{成分の積} = \sum_{\sigma} \operatorname{sgn}(\sigma) a_{1\sigma(1)} a_{2\sigma(2)} \cdots a_{n\sigma(n)}$$

を  $n$  の **行列式 (determinant)** という.  $\sum$  は  $n!$  個の置換全ての和.

## 邪悪な記法

$$\det A = |A| = \begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots \\ a_{21} & a_{22} & \\ \vdots & & \ddots \end{vmatrix}.$$

| | は絶対値, | | は行列式.  $\left| \begin{vmatrix} 1 & 2 \\ 3 & 4 \end{vmatrix} \right| = |-2| = 2.$

## 行列式の直接計算の例

加藤 線形代数 例 1-4(pp.107-109)

例 1  $n = 2$ 

加藤 線形代数 練習 1(p.108), 章末問題 3(1)(p.133)

加藤 線形代数 p.34

 $2! = 2$  項

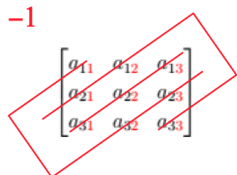
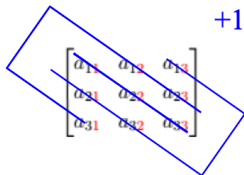
$$\det A = \det \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix} = ad - bc = \Delta$$

例 2  $n = 3$ 

加藤 線形代数 練習 2(p.109), 章末問題 3(2)(p.133)

 $3! = 6$  項

$$\det A = \det \begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} \end{bmatrix} = + a_{11}a_{22}a_{33} + a_{12}a_{23}a_{31} - a_{12}a_{21}a_{33} - a_{12}a_{23}a_{32} \\ + a_{13}a_{21}a_{32} - a_{13}a_{22}a_{31}.$$



サラスの公式

加藤 線形代数 図 2(p.108)

## mobius K4.2.10

例 3  $n = 4$  ではサラスの公式は正しくない. 正しくは  $4! = 24$  項の和だがサラスの公式を誤適用すると 8 項になってしまう. 定義をそのまま使うしかない.

例 4 対角行列, 単位行列. 和は  $\sigma = \text{id}$  (恒等置換) のみ.

$$\det A = \det \begin{bmatrix} a_{11} & & 0 \\ & \ddots & \\ 0 & & a_{nn} \end{bmatrix} = a_{11} \cdots a_{nn}$$

特に  $\det(E) = 1$ .

## ここまで来たよ

- 20 第 4 章 行列式 (置換)
  - ◆偶置換と奇置換|1. 置換
  - 巡回置換と互換
- 21 第 4 章 行列式 (行列式)
  - ◆行列式の定義|2. 行列式
  - ◆多重線形性と交代性|2. 行列式
  - 面積・拡大率としての行列式



## ◆行列式の行多重線形性

加藤 線形代数 定理 2-1(p.110)

## 定理 11 (行多重線形性)

$A$ :  $n$  次正方行列,  $\mathbf{a}_i$  行ベクトル, ある行  $i$  に対して,  $\mathbf{a}_i = k\mathbf{b} + \ell\mathbf{c}$ .

$$\det \begin{bmatrix} \mathbf{a}_1 \\ \vdots \\ k\mathbf{b} + \ell\mathbf{c} \\ \vdots \\ \mathbf{a}_n \end{bmatrix} = k \det \begin{bmatrix} \mathbf{a}_1 \\ \vdots \\ \mathbf{b} \\ \vdots \\ \mathbf{a}_n \end{bmatrix} + \ell \det \begin{bmatrix} \mathbf{a}_1 \\ \vdots \\ \mathbf{c} \\ \vdots \\ \mathbf{a}_n \end{bmatrix}$$

$f(x)$  の線形性 (linearity):  $f(kx + \ell y) = kf(x) + \ell f(y)$  が成り立つこと.

多重線形性 (multi-linearity):  $f(\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n) = \det [\mathbf{a}_1 \cdots \mathbf{a}_n]$  のどの引数についても線形性を持つこと.

証明  $i = 1$  で一般性を失わない.

$$\begin{aligned} \text{左辺} &= \sum_{\sigma} \operatorname{sgn}(\sigma) (kb_{\sigma(1)} + \ell c_{\sigma(1)}) a_{2\sigma(2)} \cdots a_{n\sigma(n)} \\ &= k \sum_{\sigma} \operatorname{sgn}(\sigma) b_{\sigma(1)} a_{2\sigma(2)} \cdots a_{n\sigma(n)} \\ &\quad + \ell \sum_{\sigma} \operatorname{sgn}(\sigma) c_{\sigma(1)} a_{2\sigma(2)} \cdots a_{n\sigma(n)} = \text{右辺}. \end{aligned}$$

## ◆行列式の交代性

加藤 線形代数 定理 2-2(p.111)

## 定理 12 (行列式の行交代性)

 $A: n \times n$  行列, $\mathbf{a}_i = [a_{i1} \ a_{i2} \ \dots \ a_{in}]$ :  $A$  の第  $i$  行ベクトル

$$\det A = \det \begin{bmatrix} \mathbf{a}_1 \\ \vdots \\ \mathbf{a}_i \\ \vdots \\ \mathbf{a}_j \\ \vdots \\ \mathbf{a}_n \end{bmatrix} = (-1) \times \det \begin{bmatrix} \mathbf{a}_1 \\ \vdots \\ \mathbf{a}_j \\ \vdots \\ \mathbf{a}_i \\ \vdots \\ \mathbf{a}_n \end{bmatrix}$$

一般化 (特殊な場合  $\tau =$  互換, として上を含む)

加藤 線形代数 定理 2-3(p.112)

## 定理 13 (行列式の行の置換のもとでの変換)

 $\tau: \{1, \dots, n\}$  の置換.

$$\det \begin{bmatrix} \mathbf{a}_{\tau(1)} \\ \mathbf{a}_{\tau(2)} \\ \vdots \\ \mathbf{a}_{\tau(n)} \end{bmatrix} = \operatorname{sgn}(\tau) \times \det \begin{bmatrix} \mathbf{a}_1 \\ \mathbf{a}_2 \\ \vdots \\ \mathbf{a}_n \end{bmatrix}$$

## 一般化のほうの証明

左辺の  $\det B = \sum_{\sigma} \operatorname{sgn}(\sigma) a_{\tau(1)\sigma(1)} \cdots a_{\tau(n)\sigma(n)}$  を変形して、右辺の形に持っていく.

あえて、 $\sigma(i) = \sigma\tau^{-1}\tau(i)$  と書く.

$$\det B = \sum_{\sigma} \operatorname{sgn}(\sigma) a_{\tau(1)\sigma\tau^{-1}\tau(1)} \cdots a_{\tau(n)\sigma\tau^{-1}\tau(n)}$$

行番号  $\tau(i) = 1, 2, 3, \dots$  で積の順をソート

$$= \sum_{\sigma} \operatorname{sgn}(\sigma) a_{1\sigma\tau^{-1}(1)} \cdots a_{n\sigma\tau^{-1}(n)}$$

合成置換  $\rho = \sigma\tau^{-1}$  とおく.  $\sigma$  の和を  $\rho$  の和で置き換え

$$= \sum_{\rho} \operatorname{sgn}(\rho\tau) a_{1\rho} \cdots a_{n\rho}$$

定理 1-1 より

$$= \sum_{\rho} \operatorname{sgn}(\rho) \operatorname{sgn}(\tau) a_{1\rho} \cdots a_{n\rho} = \text{右辺.}$$

## ここまで来たよ

- 20 第 4 章 行列式 (置換)
  - ◆ 偶置換と奇置換 | 1. 置換
  - 巡回置換と互換
- 21 第 4 章 行列式 (行列式)
  - ◆ 行列式の定義 | 2. 行列式
  - ◆ 多重線形性と交代性 | 2. 行列式
  - 面積・拡大率としての行列式

## 2 次の行列式と面積・拡大率

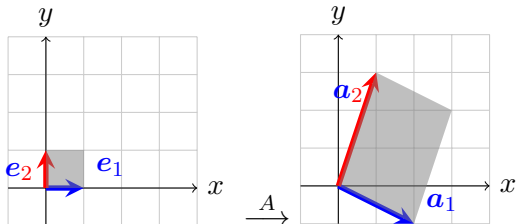
加藤 線形代数 なし 2次正方行列  $A$ ,  $\mathbf{x}, \mathbf{x}' \in \mathbb{R}^2$

$$\mathbf{x}' = A\mathbf{x}$$

$$\begin{bmatrix} x' \\ y' \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x \\ y \end{bmatrix}$$

$A$  の表す線形変換  $f$  は,  $\mathbf{x}$  を  $\mathbf{x}'$  に写す. 例:  $A = [\mathbf{a}_1 \ \mathbf{a}_2] = \begin{bmatrix} 2 & 1 \\ -1 & 3 \end{bmatrix}$ .  
ベクトル  $\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2$  は, ベクトル  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$  に写る.

$\mathbb{R}^2$  の図の正方形は,  $\mathbf{a} = \mathbf{a}_1, \mathbf{b} = \mathbf{a}_2$  を 2 辺とする平行四辺形に写る.



$\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$  を 2 辺とする平行四辺形の面積は?

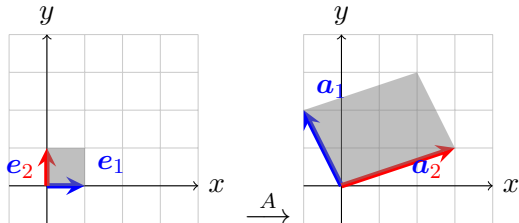
$$\begin{aligned} |\mathbf{a}_1| \times |\mathbf{a}_2| \sin \theta &= \sqrt{|\mathbf{a}_1|^2 \times |\mathbf{a}_2|^2 (1 - \cos^2 \theta)} \\ &= \sqrt{(a_{11}^2 + a_{21}^2)(a_{12}^2 + a_{22}^2) - (a_{11}a_{21} + a_{12}a_{22})^2} \\ &= |a_{11}a_{22} - a_{12}a_{21}| = |\det A| = 7. \end{aligned}$$

$f$  の拡大率は  $\det A = 7$ .

## 平行四辺形が裏返しになるとき

行入れ替え  $\leftrightarrow x', y'$  軸入れ替え.

例:  $A = [\mathbf{a}_1 \ \mathbf{a}_2] = \begin{bmatrix} -1 & 3 \\ 2 & 1 \end{bmatrix}$ .



$f$  の拡大率は  $\det A = -7$ .  
 平行四辺形が裏返しに写っているとき ( $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$  の時計回りの順番が逆になっているとき),  $\det A < 0$ .  
 平行四辺形の面積は  $|\det A| = 7$ .

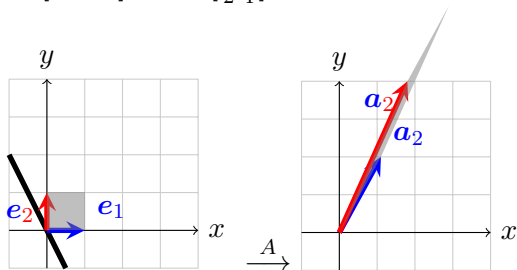
$\det A = \det [\mathbf{a}_1 \ \mathbf{a}_2]$  は,  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$  を 2 辺とする平行四辺形の符号付き面積

$\det A = \det [\mathbf{a}_1 \ \mathbf{a}_2]$  は,  $\mathbf{x}' = A\mathbf{x}$  の符号つき面積拡大率

mobius K4.2.30

## 写すと平行四辺形がつぶれるとき

$$\det [\mathbf{a}_1 \ \mathbf{a}_2] = \det \begin{bmatrix} 1 & 2 \\ 2 & 4 \end{bmatrix} = 0.$$



面積=拡大率=0.